

「戦争終結に導くのに倫理的で人道的な選択肢が他にあったことは
当時でも明白だったのにもかかわらず、原子爆弾が使用されてしまいま
した。

その悲劇に対して許しを請うのが、私の一生のテーマなのです。」

“The use of such a weapon is a new crime against human
culture.”

上智大学名誉教授 (Rev. Fr. Robert M. Deiters, SJ)

ロバート・ディーターズ師

ザビエル大学から海兵隊に、海軍日本語学校へ、
そしてイエズス会宣教師として敗戦国日本へ

イエズス会会員 カトリック司祭 米国オハイオ州出身
1924年11月生 (インタビュー時94歳)

インタビューの経緯

2018年11月15日に上智大学戦没者記念植樹式典が挙行された。式終了後6号館のソフィアンズクラブでの懇親会で、ディーターズ師は「太平洋戦争中に日本語学校で『桃太郎』を読んで日本語を勉強した」というエピソードを披露した。同席した著者（英語教師）がその日本語学習体験に興味を覚え、お話を伺いたいとインタビューを申し込んだ。翌2019年3月4日、SJハウス応接室で1時間半のインタビューが実現した。またその後、発表直前まで数度のメールで情報と説明が追加され、著者はディーターズ師のミッションについても知ることになった。

敬称略。インタビュー、訳責共に上智大学言語教育研究センター所属、篠田愛理

(四枚の写真は全てディーターズ師提供)

ディーターズ師は太平洋戦争開戦後3年目の1943年から海兵隊員として軍務に服し、諜報戦に備えるべく1945年春に米国海軍日本語学校 (US Navy Oriental Language School) に入校した。

同年8月に戦争が終結したため、戦時という非情な環境下に4か月の集中で築いた日本語の基礎を活かして実際に戦場で通訳官として活躍する機会はなくなった。終戦の年の年末に退役し、司祭職への召し出しに応じて翌年2月にイエズス会シカゴ管区に入会した。ローマ本部からの要請で日本宣教の招きに応じ、1952年来日した。日本到着後から上智大学理工学部で、国内外の電子電気工学界で、そして多岐にわたるミッションでほぼ70年間日本語を駆使して献身してこられたことは、ソフィア・ファミリーには周知の事実である。

2018年に司祭叙階60周年を祝い、翌2019年11月26日に上智大学を訪問した教皇フランシスコから、95歳の誕生日の特別な祝福をSJハウスで受けた。

第I章 ザビエル大学から海兵隊員に

太平洋戦争開始の翌年の1942年初秋、地元オハイオの州都シンシナティにあるイエズス会系のザビエル大学に入学した (Xavier University、創立1831年)。大学は生家から1時間のドライブと近く、18歳の誕生日前のディーターズ青年は、学生寮ではなく家から通学することができた。工学専攻が希望だったが、当時ザビエル大学でオファーされていたのは基礎科目のみだった。同大も後述のノートルダム大学 (創立1842年) も上智大学との長年の交換留学プログラムがある。当時米国ではカトリック、プロテスタントなどキリスト教や、ユダヤ教の神学生のみが兵役を免除されていた。第二次世界大戦が始まったことで徴兵登録が18歳に下げられ、軍務に適した上級学年の有資格者から次々と入隊していった。当時総数2,000人程で小規模のザビエル大学でも学生数が激減していき、1年後に隣インディアナ州サウスベンドのノートルダム大学に編成された。

(写真1、1945年10月撮影。海兵隊少尉の軍装で)

米国では、ニューヨーク州ウェストポイントの陸軍士官学校で陸軍将校、メリーランド州アナポリスの海軍兵学校で海軍将校と海兵隊将校を教育していた。しかし、戦時下で動員兵力が増大したことで下級将校の所要人数が増大し、数十もの一般大学で軍事訓練・養成を担当することになった。ディーターズ青年は翌1943年に徴兵ではなく志望兵として海兵隊 (US Marine Corps) に入隊し、予備役将校としての教育を受けることになった。まずノートルダム大学に派遣されたが、工学専攻が可能になり嬉しく思った。戦況悪化まで米国の大学では1学年秋期・春期の2セメスター制度だったものを、間の休暇を短縮して土曜にも授業をし、1学年3セメスターに変更された。電気電子工学と、軍務に必須の軍事訓練を開始したが、速度も上がり、集中教育になった。



工学専攻の全隊員は、その後1944年に東部ニューヨーク州イサカのコーネル大学に1セメスター派遣された。予備役将校としての訓練開始と同時にアカデミックな講義はなくなり、軍事学のみを集中して学んだ。ある海軍中佐が翌年早春に同大学を訪問し、対日戦の軍務への準備として「海兵隊に combat interpreters (戦場通訳官) が必要になった」として、決めるのに1日という即断を求めた。その将校がヒンドマーシュ (Albert E. Hindmarsh, 1902-1975?) だったことを覚えている。ハーバード大学出身で国際法学者。東京帝国大学

でも教鞭をとり、夏目漱石とも親交があったとの記録がある。それまで日本人に会ったことも日本語が話されるのを聞いたこともなく、日本について何も知らないという状況だったが、この点で他の候補の多くと同じだったのだろう。外国語の単位は工学専攻には必須ではなかったが、イエズス会系のザビエル高校でラテン語を4年間、ドイツ語を12単位取得していた。その学習歴から手を挙げ、他の数名と即採用された。武田（後述）によると、戦場通訳官には日本か中国生まれでないしは育ちで、日本語・中国語の学習体験がある学生が優先的に募集されたとある。しかし1945年時点で極東言語の学習体験者はごく少数に留まり、やむなく欧州言語学習体験者の採用につながったのだろう。

第II章 海軍日本語学校へ

米海軍極東言語学校（US Navy Oriental Language School）は、太平洋戦争までカリフォルニア州中部のモンレーにあった。真珠湾攻撃の後それまで太平洋岸に在住していた12万人もの日本人移民と、その3分の2の市民権を有する米国生まれの日系二世たちは「敵性外国人」とみなされることになった。翌1942年2月にルーズベルト（Franklin D. Roosevelt、第32代大統領、1933-45）の大統領令9066号により、内陸のマンザナーはじめ強制収容所10か所に収監された。それに伴って日系二世の教師たちも移動することになり、日本語学校は同年6月にデンバーのコロラド大学に移転した。ディーターズ師は1945年コロラドで入校し、4月から日本語集中学習を開始した。しかし、米軍の戦況は前年1944年にすでに優位に転向していて、尉官クラスの下級将校の人数を増加する必要はなくなっていた、との記録がある。

集中日本語学習はすべて少人数クラスで、各ユニットに5人ほどが在籍した。会話クラスでまず「おはようございます」を習ったが、「おや、出身地オハイオと同じ発音ではないか」と思った。昼食は毎日教師と一緒に、日本語オンリーだった。主に先生が話しかけたが、生徒たちは聞き手に徹することが多かった。ディーターズ師の説明によると、いかなればすべて「Cold Shower Method だった」そうである。これは外国語教授法の正式名称ではないが、有無を言わず厳しい学習環境に放り込み、生徒がやる気を出したり達成感を感じたりするような学習ペースは想定外、というものだったのだろうと想像する。当時の教授法が後日詳しく説明されたが、とにかくプログラム開始直後から常時高速、かな・漢字で書くことと行書・草書を読み取ることが徹底された。文法や統語論の説明は不十分なまま、読解、リスニング、会話訓練すべてが進行した。教科書としては、戦前在京米大使館付き外交官の言語訓練用に編纂された長沼直兄著『標準日本語讀本』が主に使用された。

（『標準日本語讀本』シリーズは長沼スクール創立者の長沼直兄（1894-1973）の代表的な著作であり、入門から超上級までの全7巻からなる日本語教科書だった。初級で基本文型を学習後、中級以降は文学作品・落語・日本事情、平安時代や江戸時代の文化・日本政府の仕組みなどもテーマとして取り上げられており、日本について一通りのことが学べる内容になっていた。…ウィキペディアより）

カリキュラムは月曜から土曜の週6日、午前中4時間の授業、午後は会話練習に当てられた。初級に3週間かけた。前日学んだ内容をもとに適切な表現を正確な発音で話す訓練と、教師が読み上げる文を全員黒板の前に出て書き取る訓練が繰り返された。入門レベルはローマ字表記だったが、ひらがな・カタカナを1週間でマスターし、次のクラスでディクテーション——聴き取ったパッセージの書き取りテスト——が出た。一日の終わりに教師は翌日のレッスンを前もって読み上げた。予習も厳しく、翌朝のクラスで読解、教師と生徒間の質問・答えが出、毎土曜朝のクラスで書き取りと会話テスト二つという詰め込みの毎日だった。長い一日の後夜2時間の復習が義務づけられた、との記録がある。急務を要する戦時のカリキュラムであり、行書・草書で書かれたかな・

(旧) 漢字も読み取って書き取る訓練は受けたが、「正しい書き順で美しく書く訓練を受ける余裕はなかった」そうである。そのうち取り組んだ単文の英日翻訳も、かなと習った漢字まじりで行った。到達はしなかったが、『長沼讀本』最終巻の内容は漢文と文語体の学習だったと記憶している。

全課程は 14 か月で終了するはずだった。武田によると「開校当初の目標は、1 年間の訓練後、漢字二千の読み書き、日本語の話言葉八千語の習得、日本語の新聞の読解、日本語ラジオ放送の発信と傍受、活字及び草書による日本語文書の翻訳ができることだった。… (しかしこれは) 日本という環境の中で 3 年かけて学ぶことを前提に作成されたものだが、同じ内容を日本人のいない環境下わずか 1 年で詰め込むという極めて高い目標が掲げられた (p. 62)」。また「一期生たちは、同プログラム終了時には予備役将校になれることが約束されていた」とあり(同上)、この「海軍訓練プログラムの中で最も酷烈な知的プログラム」‘…the most intellectually rigorous of Navy training program’ に対し、言語官候補たちは「不撓不屈の決意と力量」‘dogged determination and skill’ で応えた、と他資料にある。日本語学校で訓練生は軍事訓練を免除されていたが、ディーターズ師は「それは日本語学習以外の訓練が全く不可能だったから」と説明した。

教材として何が使われたのかという質問には、まず「桃太郎」や「浦島太郎」などの昔話から始め、学習が進んだ後戯曲『父帰る』(菊池寛著、1917 年)などの文学作品も読んだと答えた。個々の学習者のレベルと学習速度に合わせるために『長沼讀本』は 1 巻ずつではなく個別に使用された。学習中に米国人として面白いと感じたエピソードもあった。「席を外す (to leave/quit one’s seat)、しばらくその場を離れる・中座する」という表現だが、最初は意味が分からなかった。英語で seat は椅子の座の部分であり、「seat を取り外す」としか思えず、そのギャップがユーモラスに感じられた。「活動写真」という言葉を習ったことも思い出すが、当然軍事用語・海軍用語もあり、「駆逐艦」や「航空母艦」なども覚えた。

指揮官となる将校数の増加と日本語言語官の育成が急務であるとして、募集は何度かあり随時入校、進度によってクラス編成も数回あった。だが、膨大な学習量と高速の集中講義についていけずに進級できない生徒も出た。毎月の平均点の合計が低いままに留まり一定目標に到達しない訓練生は 4 週間ごとに去り、海兵隊の他部隊に再配置されていった。落伍者は多かったが誰がいなくなったかは後まで分からず、結果クラス意識はそれほど強くなかったと思う、と語った。戦後日本文学研究者・翻訳家になった 3 歳年上のドナルド・キーン氏 (Donald Keene, 1922-2019) が海軍日本語学校出身だったということを、ディーターズ師は後年知った。「私は日本語学校の 2 期生で海軍大尉だった」と、あるインタビューで話していたとの情報がある。同じく『源氏物語』全巻英訳で知られる元海兵隊員のサイデンスティック氏 (Edward G. Seidensticker, 1921-2007) も海軍日本語学校出身で、言語担当官として戦地に派遣され、その後外交官に、そして日本文学研究に進んだ。しかし、サイデンスティック氏が 1950 年代中頃にヨゼフ・ロゲンドルフ師 (1908-1982) に招かれて数年間上智大学で教えたことは、著者が国際教養学部 (FLA) で翻訳クラスを教えながら 2018 年によく知ったことである。

日本語を一から教えた教師にはどんな人がいたのかという質問に対しては、数名を挙げた。一人は名字を忘れたがジミーという当時 40 代の「帰米」——日本で学校教育を受けた後に米国に戻り、日本語・英語同レベルのバイリンガルになった日系二世——で、東京帝国大卒であることを鼻にかけていたとの記憶がある。ちなみに、ディーターズ師は 1968 年に東京大学から電子電気工学博士号を授与されている。サイトウという名字だけを覚

えているが、20代半ばの若い日本語教師もいた。前日に教えられた教材を完璧に学んでいなかった一人の生徒が翌朝のリーディングで詰まり、二人目、そして三人目も同様に読むことができなかったことがあった。クラスの誰も十分に復習していなかったことがついに明らかになった瞬間、なんと驚いたことにこのサイトウ先生は学生の前で泣き出してしまった。それに対し、「(せいぜい二十歳や21歳の生徒たちの前で)先生の方が泣き出すとは!こんな人種がいるのか」と驚いた(インタビュー中、これのみが日本語だった)。できない生徒の方が泣くのなら理解できるが、教師の方が泣くなどありえない、と感じたのだろう。それに比べ、ディーターズ師が「心理的プレッシャーを感じることはなかった」そうである。

日本語学校は教師数の不足を補うために、外国語教授法の専門でなくても高等教育を受けたバイリンガルなら医師、弁護士、教師などのプロフェッショナルも雇い入れたようである。華道の師範の中年女性もいたが、その日のレッスンから脱線して生け花について英語ではなく日本語で説明してくれた。自分たちの祖国日本で教育を受けさせたいと米国生まれの子供たち全員を次々送り帰した教育熱心な一世がいたことについては、当時すでに聞いていた。訓練生らはみな親切な教師たちに好印象を持ったが、担当が次々代わるために教師と個人的に親しくなる時間的余裕はなかった。まず日本語を通して日系米人に好感を抱くようになった。

一、二度だけだったが、50、60代の白人教師から日本語を習うことがあった。横浜で関東大震災(1923年)に遭遇し、地震を体験したことのない米国人にその惨状を話してくれた。あるできごとの全容を初級レベルであってもすべて日本語の説明で理解できた体験は、それが初めてだったと思う。その教師は戦前の日本で宣教師として働いていたそうである。ある統計によると、1942年から1946年まで総勢1,650名が日本語学校に学んだが、177人の日系人教師だけでは当然ならず、日本ないしは中国生まれ、その後現地で育ったバイリンガル、ないしは多言語使用が可能な白人米国人も十数名採用された。明治学院(開学1887年)などプロテスタント系ミッション・スクールの戦前の教師、東京帝国大学の英語教師の息子で日本生まれ・日本育ちの米国人や、同じく日本育ちで日本語が流暢なビジネスマンの息子も含まれていた。

第III章 8月6日の号外

米中部標準時間の6日午前、言語官候補の若い海兵隊員たちが10、15分の休憩を芝生の上で過ごしていた時だった。新聞配達少年が“Extra, Extra!”と叫びながら号外を配りにきた。それには“New Bomb Destroys Hiroshima”と見出しが躍っていた。教師の中には広島で子供時代を過ごした帰米が多く、どんな思いでそのニュースを聞き、号外を読んだのだろうか——語学兵らは胸を痛み、米軍の勝利を喜ぶことなどは到底できなかった。壊滅した広島惨状を想像して二世教師たちは嘆きを押し殺したのだろうと、その慟哭と混乱に思いを馳せた。教室に戻る時になっても、誰も親族の安否などを尋ねることはなかった。

太平洋戦争開戦翌年の1942年にザビエル大学に入学した後、ギリシャ語・ラテン語古典文学の教授のロレンス・ヘンダーソン師の読書クラブに入った。ヘンダーソン師は20、30歳年上だっただろうか。プラトンの『国家』などを原著で読んで英訳もしたが、工学希望だったので教授のクラスを取ったことはなかった。しかし、ザビエル大学を去って海兵隊員としてノールダム大部隊に派遣された後、一家に招かれて訪問した神父に休暇中に出会ったり、転校先から文通を続けるなどして交流が続いていた。8月6日から数日して受け取った手紙には、次のように認めてあった。“I told the students at the morning Mass, ‘With this bomb, America lost the war.’” (「原爆投下によって、米国は——道徳的な意味で——戦争に敗北した」と、ザビエル大学生寮の朝のミサで説教した。)ヘンダーソン神父とは、会うたびに連合軍によるドイツへの無差別爆撃の非道徳性

についてなど議論を重ねた。東部の都市ドレスデンは1945年2月に市街の85%が破壊され、数万から15万人もの一般市民が死亡したとの記録もある。「戦時における犯罪行為で、いかなる交戦国も敗北したことになる」との解釈で、無辜の一般市民の大量殺戮は犯罪そのものであるとの結論に達していた。ヘンダーソン師以外にも戦時中、そして戦争直後から連合軍の無差別空襲を毅然と批判した著名な倫理神学者は多数いた。戦争犯罪に反対を表明したそのようなイエズス会員による書籍、記事もすべて手元に残してある。

ディーターズ師は原爆投下70回忌の2015年8月、イエズス会評論雑誌『アメリカ (America)』にあの衝撃的なニュースを知った瞬間のエピソードと、原爆の倫理的是非についてのオンライン記事を寄稿している。'Bombing Japan: Was It the Only Option?: Revisiting the atomic horrors of Hiroshima and Nagasaki' (原爆投下は唯一の選択肢だったのか? ヒロシマとナガサキの核爆弾の恐怖を再考する) という題だった。その記事に対して、「原爆が終戦を早めた」、「全アジアにおける日本軍の蛮行に対する報いであり、倫理的正義だった」、「原爆投下によって日米双方の死者数を激減させることができた、したがって投下は間違っていないかった」など、知識人を含む米国内外の読者から数多くの賛否両論が延々と寄せられた。ディーターズ師はそれらに対して解説と反論を丁寧に書き込んでいる。また、海軍日本語学校で目撃することになった日系教師の悲嘆を忘れることはなく、戦争前夜から長年人種差別に苦しんだ日系米人の苦悩についても思い続けた。修道女の妹が、ある日系家族の苦難の歴史について書かれた本を送ってきたこともあった。(写真2、1946年元旦に撮影。少年時代からの友人たちと。二人は兄弟で、兄は陸軍上等兵、弟は海軍三等兵曹)



太平洋戦争終結により海軍日本語学校での学習は4ヶ月で終了し、全課程を終了することも卒業することもなくなった。したがって実際に戦地で、ないしは1952年までの7年余の連合軍占領下の日本で通訳官として活躍する機会もなくなった。ディーターズ師より一年、あるいは数か月でも早く日本語専門家としての訓練を開始した言語官たちは「通信傍受、暗号解読、日系人コミュニティの監視などに従事」(武田、p. 59) し、捕虜尋問、遺棄された軍関連書類、日本兵が戦場に遺棄した手紙、日記、メモなど私的な書簡の翻訳にも携わった。占領軍の一員として1945年9月以降に来日した語学兵と日系二世たちは、東京裁判や新憲法草案起草にも深く関わるようになった。

IV 章 イエズス会入会

海兵隊入隊後2年余で除隊を希望したが、正式な除隊には許可が必要だった。カトリック大司教が全米軍の Military Ordinariate という任務に当たっており、それは全米軍対象の「チャプレンの長」というものだった。特別許可を得るためにその Military Ordinariate に許可申請を出した。その間、再びゼビエル大学の集中講義で社会学を勉強したり、友人とダンスやソフトボールに興じたりした。年末に「司祭職を囑望しているという理由で除隊を許可する」との知らせが届いたが、それは翌年1946年に枢機卿になったスペルマン大司教 (Francis Spellman, 1889-1967) からの通達だった。1946年2月にイエズス会シカゴ管区で修練期に入った。ディーターズ家は両親ともドイツ系の熱心なカトリック信者で、子供は男、女、男、女の4人だった。父親が経営していた印刷会社は、後に弟が引き継いだ。長兄に倣って妹二人も米国で創立された修道会のシスターになり、それぞれ校長、理事、教授などの要職を務め上げた。一番心を打ち明けてきたのは、すぐ下の1歳3か月違いの

妹だったかも知れない。その妹も 1948 年に修道院に入った。

戦争は日本を物質的にも精神的にも徹底的に破壊し、国土を焼き尽くしただけではなく、戦前・戦中のイデオロギーからの急激な転換は人心を疲弊させてしまった。この惨状を鑑み、イエズス会総長は日本の精神的再建のために志願者を募り、宣教師として送り出す計画を立てた。占領軍最高司令官マッカーサー元帥も、キリスト教宣教師が日本に入国しやすい状況を用意した。ヤンセンス第 27 代イエズス会総長 (Jean-Baptiste Janssens) 選出直前の 1946 年、総長代理ドゥ・ボイン神父 (N. de Boynes) は各管区長に手紙を送り、日本への会員派遣を要請している。新総長は 1948 年に日本を新たに準管区とすると発表し、翌年「全管区長宛ての手紙で、宣教師を日本に送るよう呼び掛けた。私は、ほとんど全イエズス会からできるだけ多くの会員を日本に送るように努めた」との記録を 1951 年に残している。(写真 3、1946 年夏撮影。オハイオ州ミルフォードのイエズス会修練院で。スータンで腰にロザリオの修練者)



戦後の状況は、日本への派遣を志望する個人が各管区に願い出るという恒例の手順ではなく、ローマの総長に直接希望を表明するという例外的措置を可能にした。この措置は、多数の若い宣教師が日本行きを目指すという結果をもたらした。ちなみに日本は 1954 年に独立管区に昇格した。戦前の上智大学には北ドイツ管区出身の会員と日本人会員の教員が多かった。だがこの方針転換によって戦後教授陣が多国籍化し、国連代表ほどの国籍数のイエズス会員が教えていたことを古い卒業生はよく覚えている。イエズス会のある記録によると、1947 年から 1999 年の半世紀余りの間、ほぼ 30 か国からの会員約 200 名が日本での宣教、高等教育、そして社会正義の分野で活躍したとある。

第 V 章 敗戦国日本へ

インタビューの翌月、2008 年発行の故郷シンシナティの大司教区報 *The Catholic Telegraph* に掲載されたインタビュー記事が送られてきた。それには “In 1952 Fr. Deiters volunteered, and was sent to Japan, where he eventually became part of the Japanese Province.” (ディーターズ神父は 1952 年に日本派遣を志願して手を挙げ、日本に送られ、後にイエズス会日本管区の一員になった) とあった。日本で将来働くことを望み、祈り、自らローマに願い出たのだろうか？ 希望して来日したのかが知りたくなった。確かめると、「そうではない。私から日本派遣を願い出たのではない」との意外な答えが返ってきた。ディーターズ師は「何であれ、神のみ旨を果たすことをのみ祈った」そうである。

それからしばらくして、1950 年のあるエピソードが送られてきた。カトリック教会は 8 月 15 日に「聖母の被昇天」を盛大に祝う。その祝いの席で、「アベマリア」を様々な言語で壇上から唱えることになった。英語で ‘Hail Mary’、文語体の「天使祝詞」では「めでたし、聖寵充滿てるマリア」で始まる祈りである。日本語を担当することになったが、当然海軍日本語学校では教材として祈りを習うことはなかった。それである日系米人に手紙を書いて、日本語の「アベマリア」を教えてもらった。当時 300 名ほどいた修道者たちは、世界中の宣教地から一時帰国していたイエズス会員の唱える 12 もの言語で、聖母への祈りと唱和することができた。ちなみにその年の 11 月、教皇ピウス 12 世 (1939-1958) は「聖母の被昇天の教義」を公布している。二十代前半には「日本語を話して人

生を送るとは想像もしていなかった」と語ったが、その「アベマリア」が後に届いた日本行きの幸先だったのだろうか、と著者は想像する。

イエズス会会員には、入会から司祭叙階まで 10 年から 12 年ほどの勉学が標準である。ディーターズ師によると、「会員個人の意向は年に 1 度管区長と面談し、時間をかけて固めていくもの」だそうである。長上の決定がどのようなものになっても、心を開いて神の招きを待ちながら、与えられる使命に備えて哲学と神学の勉強を数年続けた。その間、もしシカゴ管区に派遣要請が届けばその招きを受けてもいいと思ったそうだが、「日本語の勉強はほんの数か月で、日本に対する知識も乏しいものでした」と、あくまでも謙虚な答えが返ってきた。そうするうちに、日本への派遣の報せが 1951 年度中に修道院に届いた。日本行きが最終的に確定した瞬間、どんな気持ちになったのだろうか。尋ねると、「日本の社会、出会うことになる各国出身のイエズス会の仲間など未知数が多くありました。でも、戦時中に数か月日本語学校で知り合った日系米人が好きになった経験があって、ワクワクして喜んでいました」との答えが日本語で戻ってきた。二十代半ばの若き修道者の、まだ見ぬ日本への期待と新鮮な喜びが感じられる言葉である。そのころ、チエルマック師 (Nicolaus Čermák、当時のチェコスロバキア出身) に出会った。横浜の栄光学院で数年教えて宣教の経験がすでにあり、司祭叙階前の神学の勉強のために滞米中だった。週 1 度一緒に散歩しながら日本語で会話をし、俳句や日本文化について教えてもらった思い出がある。

日本への出発には、10 歳年下の末妹ジョアンの修道会入会が重なった。「長男ロバートと末娘までもが同時に家を去ることになって、ご両親はどう思われたのか」との問いに、「喜んでいた」と答えた。1952 年 4 月に連合国軍の日本占領が終了した。同年 9 月、日本に鉄鉱石を輸送する大型運搬船でサンフランシスコを出港した。SS Marine Runner は大圏航路をとり北米大陸西岸を北上してアリューシャン沖を航行し、千島沖から日本列島東岸を南下した。当時最短の 11 日間の航行で同月 20 日に日本に到着した。日系米人ではない日本人に横浜港で初めて出会ったことになる。当時田浦 (横須賀) にあったイエズス会日本語学校で、今度は宣教に必要な日本語を 1 年間勉強した。海軍日本語学校で身に付けた基礎は役立ったかとの愚問に、「もちろん」と答えた。



(写真 4、1996 年ごろ。家庭を持った弟ポール (2016 年帰天) のシンシナティの家で。姉妹で同じ修道会——Sisters of Charity of Cincinnati——に入った Sr. ジュリア・メアリー (2020 年 1 月帰天)、Sr. ジョアンと 4 人で)

第 VI 章 日本でのミッション

翌 1953 年に上智大学で教え始めた。司祭叙階は 5 年後の 1958 年 3 月 18 日、麹町聖イグナチオ教会で土井辰雄東京大司教によるものだった (1892-1970、1960 年に日本人初の枢機卿)。五か国からの同志たちは、日本人 4 名、スペイン 3 管区の 7 名、米国 3 管区の 3 名、ハンガリー人 1 名、そしてブラジル人 1 名の計 16 名だった。ディーターズ師以外で上智大学の教壇に立ったのは、河野純徳先生 (法学部)、土屋

吉正先生（神学部）、柳瀬睦男先生（理工学部）、マヌエル・ディエス先生（外国語学部）、フランシス・マシー先生（文学部）、ゾルタン・ビハリ先生（後の比較文化学部）たちで、ルイス・カンガス師は麹町聖イグナチオ教会の主任司祭を長年務めた。この慶事には、はるばる故郷オハイオから母親と父方のおばが参列してくれた。

『アメリカ』誌に 2015 年に寄稿したブログ ‘Was bombing Japan the only option?’（原爆投下は唯一の選択肢だったのか？）を書いた経緯について、インタビュー後再度読む機会があった。太平洋戦争とその終結に至った背景についてのディーターズ師のイエズス会入会前からの考えが示されている。

「なぜ対日戦争が始まり、そして特にどのような状況で終わったのかを、過去 70 年間可能な限り理解しようとしてきました。アメリカ合衆国が高い道徳的規準を、いつ、なぜ維持できなくなり、その結果ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下で一般市民の無差別大量殺戮に手を染めることになったのかについても知ろうとしてきたのです。」¹

また 2020 年春、次の説明が送られてきた。

「ハーグ陸戦条約が禁止していたのにも拘わらず、米軍も他国軍同様第二次世界大戦開始のほぼ直後からその一線を越え、敵国民間人への大規模爆弾投下を実施しました。言い換えれば、原爆投下よりかなり前に米軍は道徳規範から逸脱していたとはいえませんか？しかしハーグ条約には道徳原則がもう一つあり、それには「軍事的目的の達成であっても、過度の武力行使や、例えば毒ガスのように著しい苦痛と長期にわたる損傷を負わせるような武器使用は許可されるものではない」とあります。原子爆弾の使用は「長期にわたる損傷を負わせる」「過度の武力行使」そのものであり、日本を降伏させる目的であってもその使用は決して許されるものではなかった——この点からも、原爆投下は米国政府にとって道徳的破綻だったといえるでしょう。」²

ブログ記事 ‘Was bombing Japan the only option?’（原爆投下は唯一の選択肢だったのか？）では、広島と長崎への原爆投下（8月6日、9日）から15日の降伏までの期間（正確な日付は不明）に、当時の外務大臣兼大東亜大臣だった東郷茂徳（第71代外務大臣、1945年4月9日-同年8月17日、鈴木貫太郎内閣）がスイス政府を通して発表した抗議の手紙を、掲載したジャパントイムズ紙から丁寧に引用している。それは日本政府が発表した原爆投下に対する最初で最後の強硬な抗議文だった。³

どのような信念のもとに日本で働いてきたかについても、インタビュー後にメールで送られてきた（2019年3月28日付メールより）。

…戦争終結に導くのに倫理的で人道的な選択肢が他にあったことは当時でも明白だったのにもかかわらず、原子爆弾が使用されてしまいました。その悲劇に対して許しを請うのが、私の一生のテーマなのです。⁴

この文を読んだ瞬間、著者の胸に熱いものがこみ上げてきた。上智大学で私たちはこんな先生に教えられたのである。

第 VII 章 上智大学の他の日本語学校体験者について

ディーターズ師によると、故マシー師（Francis Mathy, 1925-2015）は陸軍日本語学校終了後、1946年初旬に進駐軍（SCAP, Supreme Commander for the Allied Powers、連合国軍最高司令部）陸軍少尉として終戦直後の東京に派遣されたそうである。首都東京の荒廃の中に立ち尽くし、「いずれここに宣教師として戻ってくることを決心した」と生前著者に語っている。マシー師は 1947 年 7 月にイエズス会に入会して 1953 年に再来日、ディーターズ師と一緒に上智大学で教え始めたのはその秋だった。二人の日本語学習体験は違っており、「日本語学校の全課程を終わっていたから、私は田浦の日本語学校で勉強する必要はなかったんだよ」と冗談めかしてよく話していたと他のイエズス会員から聞いている。マシー師は 2005 年の 80 歳の誕生日に ‘Memoirs of An Octogenarian’（「八十歳の追想録」）を著している。マシー師の日本語学校での学習、言語官としての体験、そして日本宣教を志望した経緯も、誰か教え子に記録として残してほしいものである。この同い年の二人は 60 余年にわたり一番近い友人だった。

参考図書：

『太平洋戦争日本語諜報戦、言語官の活躍と試練』、武田珂代子著、ちくま新書 1347、2018 年 8 月

以下の情報提供者（2020 年 9 月当時）に謝意を表したい。

上智大学名誉教授、David Wessels 師
 上智大学名誉教授、Michael Milward 師
 上智大学学事局グローバル教育推進室、葛西利衣子氏
 上智大学財務局管財グループ、谷川寿彦氏

ロバート・ディーターズ師（Rev. Fr. Robert M. Deiters, SJ）

学歴

1952 年 米国イリノイ州 Loyola University of Chicago、文学学士号（ラテン語文学、当時司祭養成の標準条件）
 1959 年 上智大学大学院修了、神学修士号
 1963 年 米国ウイスコンシン州 Marquette University 大学大学院修了、電気工学修士号
 1967 年 東京大学工学研究科電子工学博士課程修了
 1968 年 東京大学工学博士号

職歴

1943～45 年 米海兵隊、退役時海兵隊少尉（US Marine Corps, Second Lieutenant）
 1946 年～ イエズス会会員
 1958 年 カトリック教会司祭叙階（麹町聖イグナチオ教会にて）
 1968 年～ 上智大学理工学部助教授
 1971 年～ 上智大学理工学部教授

1990年～ 上智大学理工学部特別待遇教授

1995年～ 上智大学名誉教授

その他の職歴

1981～82年 客員研究員 University of California, Los Angeles (U.C.L.A.)

1968～75年 共同研究員、宇宙科学研究所（当時東京大学）

1996～2003年 理工学振興会会長

学内の役職

電子計算機室初代室長、電気・電子工学科長、理工学部長

学会及び関係活動

所属学会：国際電気・電子通信学会（IEEE）、Senior Member

1989～95年 日本シミュレーション学会理事

¹ “Over the past 70 years I have tried to learn as much as I could about how the war with Japan had begun and especially how it ended—when and why the United States lost the moral high ground by engaging in indiscriminate mass bombing of civilians, culminating in the dropping of atomic bombs on Hiroshima and Nagasaki.”
(<https://www.americamagazine.org/issue/bombing-japan-was-it-only-option>)

² “Actually, the U.S.A.—and all the military on both sides—had gone over to mass bombing of civilian populations not long after WW II began, even though the Hague Conventions forbade it. In other words, the US had already left the “moral high ground” long before the A-Bombs. However, there is another moral principle that says “to achieve a military objective, excessive force nor weapons like poison gas that cause painful and long-lasting injuries must never be used. Using A-Bombs was the use of excessive force that caused lifelong injuries to attain the objective, namely, the surrender of Japan. This also was a moral failure.”

³ “It is the fundamental principle of international law in wartime that belligerents do not possess unlimited rights regarding the choice of the means of harming the enemy, and … must not employ arms, projectiles or material calculated to cause unnecessary suffering (Hague Conventions). The indiscriminateness and cruelty of the bomb the U.S. used this time far exceed those of poisonous gases and similar weapons, the use of which is prohibited because of these very qualities… The use of such a weapon is a new crime against human culture.”

⁴ “…a lifelong theme and my way of begging forgiveness for using the A-bomb when there were other ethically and humanely better ways to try to bring the war to an end.”

